

文 献 紹 介

江波戸 昭著『東京の地域研究(続)』

大明堂 1997年3月

A5版 462頁 本体8,000円

本書は12年前に出版され、東京の地域研究書として定評のある『東京の地域研究』の続編である。本書はすでに増井好男(『農村研究』第86号1998)、斉藤功(『地理学評論』Ser. A 71-11 1998)、羽田博昭(『地方史研究』48-1 1998)らによって紹介・書評がなされている。こうした状況を踏まえて本書をあえて取り上げた理由は、これまでになされた本書の紹介や書評において筆者の現象認識やその分析を支えている基本的なものの見方、考え方、すなわちこれを仮に「地理学観」と称するとすればこの「地理学観」が必ずしも十分に紹介され得たと思われないことにある。

本書が、増井好男も紹介するように「明治期から今日までの東京農業を連続的にとらえるために」不連続に残存する「統計資料や報告書を丹念に整理し」、「地図にあらわし」、東京農業の変遷過程を「地域というレベル」で描いた「貴重な成果」であることに多言を要しない。さらに『東京府志料』、『渡辺府知事管内巡回記』、『東京府下農事要覧』、『東京府統計書』、『東京府生産調』、『東京府の産業』、『東京市農業調査書』、『東京市農業に関する調査』、『東京都中央卸売市場年報』など明治以降に刊行された膨大で煩雑な統計資料や報告書を変遷する単位空間を再調整しながら系統的かつ地域的に行われた処理・分析作業は、まさに「丹念に」行われたものであり、時間をかけた地道な努力のたまもの以外の何ものでもなく、今後における当該地域の研究のための貴重な「財産」となることに間違いはない。

著者が本書を仕上げていく上で展開する資料分析等の職人芸的作業の継続と集積は、著者が持つ「現在の東京に対する強烈な危機意識」に支えられたものであると羽田博昭は指摘している。事実、著者は「あとがき」で「第2次大戦まで」「“世界最大の田舎”といわれるほどに都市と農村」が「調和」した東京は、戦後の「みせかけの経済発展の代償として」「かけがえのない水と緑を消滅させ」たと記し、本書が「“生活都市”東京に対しての挽歌」でもあると述べている。こうした「生活」目線でものごとを分析し主張する姿勢は、これま

でに著者が公刊した先述の『東京の地域研究』の他、『日本農業の地域分析』(古今書院 1965)、『蚕糸業地域の経済地理学的研究』(古今書院1969)、『地域構造の史的分析』(大明堂1992)において扱われてきた「地域」でも共通するし、著者のもう一つのライフワークである「民族音楽の研究」も「民衆」の生活目線で物事を捕らえている点において共通している。また、著者は「地域」を一貫して「歴史的存在としての空間」として認識し、かつ歴史の担い手であり、生産の担い手である(同時に地域の担い手でもある)「民衆」が明治以降進められてきた「近代化」、すなわち経済における資本主義化にどのような形でこれに巻き込まれ、また対応してきたかということを常に問題意識の中心に据えてきた。著者が「あとがき」において、地域の本来あるべき姿を「都市と農村」の「調和」した「豊かな人間の生活」空間であるとする「庶民」の生活目線からの主張は、筆者の研究を支える一貫した視点である。

「一抹のひもじさ」よりも地域を支える人々によって保たれる「うるおいとやすらぎと、絆」が「豊かな人間の生活」の尺度であるとする現象の捉え方は、戦後のわが国における「物質」の豊かさを優先させた経済発展を「みせかけの経済発展」と評価することになる。なぜならば「物質」的豊かさを優先させた戦後わが国の経済発展が、都市生活から「うるおいや安らぎ」を消し去り、本来「生活都市」の主役であるべき「民衆」を疎外し、「生産」や「地域」の担い手である「民衆」が支えてきた「文化＝農(カルチャー)」を「お仕着せの文明」に置き換えてきたためであろう。著者は、本書の各事例を通して「近代都市の膨張」が「近郊農業の自主的展開」を阻害し、「農村側」が「一方的対立関係に追いやられる」ことを「生活都市」の主役である「民衆」に焦点を当てて実証し、「都市」をもう一度考え直す必要性和そのための一つの方法論を本書の深部で主張しているとみることが出来るのではないだろうか。

各章の分析対象や使用資料類、分析結果の概要等についてはすでに増田好男らの書評でつまびらかになっているから、ここでは省略をし、歴史的存在としての「地域」と「生活」目線でもとらえられた「東京の地域研究」に焦点を合わせて本書を

概観すると、実証研究のための新たな試みとして「オーラル」資料の活用が指摘できるであろう。これまでの地理学的実証研究は、できるだけ「現場」に近い状況の中で集計・処理された「客観的資料」、たとえば市町村役場等が集計した統計資料等を駆使することによって実証研究を行ってきたし、こうした資料の収集・分析に研究上のかなりの勢力を費やしてきた。無論、市町村役場によって残された資料を活用した研究の有効性を否定するものではないが、こうした資料が「為政者側の都合」に大きく依存したものであることも否定できない。従って、「民衆」の目線で現象をみようとしたとき、一定の限界が存在することも否定できないであろう。

こうした観点に立脚したとき、本書で著者が採用した「生産者自身の側から、その口を通して」語る「Ⅱ 明治後期・大正期の東京農業（Ⅰ）—古老聞書から—」は、統計資料類に現れない庶民生活の具体的諸側面を現している。

例えば当該時期の碑文谷地域では筍が唯一の換金作物であったこと、竹をカゴ屋に売却したこと、海苔しびにも使用したことや「摘み田」、「田下駄」、「竹の上に乗って」の耕作といった話から現在の目黒区・渋谷区・大田区・世田谷などの谷地田の多くが湿田または過湿田であったこと、蔬菜類の出荷はリヤカーや大八車で行われ、早朝に出荷し市場からの帰りに肥担桶で荷を積んで帰ってきたこと、ある程度の集肥圏が地区間・農家間で決まっていたこと、近代都市の膨張と関連して近郊農業圏が外縁部に異動すること、蔬菜の出荷が盛んになるとともに「たちん坊」と称する荷車の後押しをする駄賃稼ぎが現れること、東京が軍都となるとともに集肥圏や集肥方法が変わり、かつ軍向けの蔬菜生産が始まること、「夜ごえ」のきまり、洋ものの野菜の価格有利性、船による下肥の大量輸送と蔬菜の産地形成との関連、都市ゴミの発酵熱を利用した促成栽培の実態などをはじめ「田上がり正月」、「雨乞い行事」など生産と生活とが一体となりながらさらに山の手や東郊など地域的に特色を伴って東京の農業が展開してきた実態が生産者の口を通して語られている。

オーラル資料自体「常に信憑性が問題となるし、実際にくい違いもある」にも係わらず、明治期から大正期にかけての東京農業を解明するために著者があえて「古老聞書」を使用したのは、『東京府志料』において可能であった「町村単位」の分

析を引き継ぐべき農業統計資料がほとんど存在しない」ためであると述べているが、逆に「古老聞書」を利用することが東京農業を担ってきた「民衆」の「生活」目線で現象を捕え得ることを主張しているとも理解できる。事実著者は各地区に残された「古老聞書」から「可能な限り多くの事例を引用し」、明治後半から大正期の東京農業の「検証」を試みているし、このために本書のおよそ三分の一に相当する166ページを費やしているのである。また、「Ⅲ 明治後期・大正期の東京農業(2)—耕地の変遷—」における徳富蘆花の『みみずのたはこと』の序文の引用は、武蔵野郊外に隠棲した自然主義文学者の文章を用いて明治維新以降の「近代都市の膨張とともに、農村側」が「一方的な対立関係に追いやられていく」状況を提示している。さらに、「Ⅴ 昭和後期の東京農業」における新日本文学会編(1946)『東京の一日』に収録された細野孝二郎の「歪んだ表情」や芝木好子の「残った地域」など終戦直後の巷の状況を描写した文章の引用や戦時中の「隣組回報」、「市政週報」記事などの活用は、著者が現象をその担い手である「民衆」レベルで把握・分析・処理しようとする試みの顕現とみてよいであろう。

オーラル資料は、伝統的地域研究の手法においてともすると統計資料類の不足部分の補填や、その行間を埋める資料として位置づけられてきた。しかし、「古老聞書」が示すように記録された「語り」は、生産を担い生活を営み続けてきた人々の記憶の中に存在する「事実」であり、「民衆」の「生活」目線で捕えた東京農業の実態をより具体的に捕えていることに間違いはない。さらに付け加えるならば、「東京都内湾漁業の盛衰」も「東京における職業分化と地域分化」も「庶民」の「生活」目線で捕えた「東京の地域研究」なのである。

著者は各区の教育委員会や郷土史会などのまとめた「古老聞書」から東京農業を語るために「多くの事例」を的確に抜き書きしている。こうした作業が著者の東京における「生活」経験と『神田市場史』（上・下、結巻）の執筆、『東京府志料』の復刻のための作業過程等で蓄積された「博識」に依拠していることに間違いはない。

本書は、地域現象を現象の担い手である「民衆」の「生活」目線で捕えるために統計資料類等の分析・処理という伝統的地域研究方法に加えてオーラル資料の活用がきわめて有効であること、すなわちオーラル資料類の持つ地域研究に対する有効

性とその扱い方を提示しているとみてよいのではなかろうか。今後における一つの研究方法を示す著作として一読をお薦めしたい。

(松村祝男)

新修名古屋市史第三専門部会編：

『新修名古屋市史報告書 4 江戸期なごやアトラス—絵図・分布図からの発想—』

名古屋市総務局 1998年9月

A4版 77ページ 2,380円(税込)

歴史地図が力を発揮する場合には、幾つかの種類があるらしい。都市プランや海岸線の位置を復原するものであれば、位置比定そのものが一つの学説を表す場合がある。それに対して本書の魅力は、広域を対象とした地誌をデータベースとして扱い、それをそのまま地図化することによって、データそのものに語らせる分布図を示したところにある。そのような処理に耐える地誌は、近世においても決して多くはない。また原史料にあたっての膨大な情報量の処理は、かなりの労力を要求する。本書は、さらにその上に、近世期の歴史地図としては他に類を見ない様々な主題が取り上げられており、一図ごとに読者の興味がかきたえられるものとなっている。

本書の編者は、新修名古屋市史の近世前期を担当する部会である。したがって本書は、現在刊行中の名古屋市史編纂の過程から生まれた歴史アトラスであるが¹⁾、実際に112に及ぶ図の作成とその解説を執筆したのは、執筆委員である名古屋大学文学部地理学教室の溝口常俊教授、ならびに山元貴継・高井寿文・村田祐介・野広哲史の諸氏であり、分布図ソフト「マンダラ」は谷謙二氏によって開発された。また、本アトラスの構想は、すでに溝口教授によって人文地理学会特別研究発表においても披露されており²⁾、その場では、本書には必ずしも明示されなかった方法論的な関心についても議論が行われている。以下、本書を紹介するにあたっては、その点についても言及したい。

さて、本書で最も活用された史料は、二つの著名な地誌、『寛文村々覚書』(1672)と『尾張徇行記』(1822)である。ともに、史料として従来個々に参照されてきたものであるが、尾張一国の村ごとの諸データが17世紀と19世紀の二度にわたって残されているという幸運な状況は、これまで十分には活かされてはこなかった。その理由としては、データベース作成と製図作業の煩雑さもさること

ながら、歴史地理学者にとっても、往々にして地誌史料とは特定の村や特定の項目のデータのみを選択的に利用するものであって、地誌史料全体を総合的に分析するという手法がこれまで余り試されてこなかったためだ、と言わなくてはならない³⁾。溝口教授が発表時に掲げた「近世尾張の地域構造」というテーマは、歴史地理学者にとって魅力的なテーマの一つであるが、その追求にあたって特定の行政文書や村文書、あるいは商人文書から個別のデータを蓄積する手法を取るのではなく、地誌史料をデータベースとして扱う方法からどのような議論が導かれるのかは、手法や方法論の議論としてみるときに、大変刺激的なものとなる。

史料の操作に関して、溝口教授は、刊本に含まれる数値の誤りを回避すべく、原本との照合を行うという正攻法を取った上で、両史料をデータベース化している。その上で、データを図化するために、『尾張国町村絵図』(1841)、『尾張志』に付せられた郡図(1830-44)ならびに地籍図(1884)によって村境を確定し、これをベースマップとしている。ただし地誌史料では、名古屋城下のデータが村ごとのデータと比較できるようには示されていないため、作製された図の多くでは名古屋城下部分が空白として残されている。そのため本書には都市名古屋のアトラスという性格は薄く、現代風にいえば名古屋都市圏もしくは尾張中部アトラスとしての性格が強いことに注意しておきたい。

次に内容に関して、まずI章「自然と環境」では、1「集落」において村落と地形が概観された上で、2「土地利用」で田畑はもちろんとして、山林や草地、新田、見取場のデータが図化されている。ここでは水田の卓越が確認されながらも、水田以外の土地利用にも注意が注がれている。

II章「社会と経済」では、1「領地・支配」において尾張藩の直轄地と相給村の分布が確認された上で、2「人口と石高」では人口と戸数、世帯員数の増減、性比のデータが示され、歴史人口学的分析の一端が開示されている。とりわけ、近世を通じた核家族化の進行や、名古屋近郊にのみ特にみられる人口減少の状況が鮮やかに図化されている。続いて、一人当たり石高や反当たり石高、無高の分布、および牛馬の分布が示される。馬文化圏に属す名古屋では牛頭数は微々たるものにすぎないが、近世期の馬頭数は減少していたといったことも表現されている。

次に、3「産物と商品流通」では尾張全図が掲